



随筆集

遠くのこだま



福永武彦

新潮社版

とお
遠くのこだま



昭和四十五年八月三十日 発行
昭和四十六年一月十日 四刷

定価 六〇〇円

著者 福永武彦
ふくなが たけひこ

発行者 佐藤亮一
さとう へいいち

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京(廻)一一二(大代)
千一六二 振替東京八〇八

乱丁・落丁のものは本社又はお買求め
の書店にてお取替え致します。

目次

旅 11

京だより 13

貝合せ 21

梓湖の秋 32

北海道網走周辺 41

海の想い 54

旅情 57

心 65

失われた青春 67

友情の中の愛	69
純潔について	73
美しいもの	75
人生の学校	77
カタルシスについて	80
始める前	83
眼・耳	87
幻想の画家たち	89
映画の限界と映画批評の限界	92
西本願寺本三十六人家集	98
画家のアイシュ	109
豪華と静寂と悦楽と	117

好きな絵 120

ギョスタヴ・モローと神話の女

123

「眼」と「手」 127

ワグナー体験 131

音楽の魔術 134

私にとっての音楽 138

日常茶飯 143

カメラの一ヶ月 145

テレヴィの魔力 147

東大仏文研究室の今昔 149

紫の背広 152

私と外国語 155

蛇の話

157

絵の話

162

新撰いろはかるた

167

東京の夏

169

習字

173

英彦山ガラガラ

175

前売切符

177

時計の話

180

たかが金魚

184

四つの展覧会

189

ピカソ・ゴル・妄想

191

ブラックの版画

196

ルオー遺作展 200

先駆者フジタの道 206

四枚の絵 211

金計量者（レンブラント） 213

沈黙の支配する町（ヤン・ファン・デル・ハイデン） 215

幸福の岸辺（ボナール） 221

現代の呪術的風景（ランデルトワッサー） 222

四つの映画 225

「野いちご」と意識の流れ 227

「怒りの葡萄」とアメリカ的楽天主義 229

「太陽はひとりぼっち」と内面的風景 232

「アラビアのロレンス」と「わんぱく戦争」

234

四つの音楽

237

春の夜のシューベルト

239

夏の夜のヴィヴァルディ

243

秋の夜のアルビノーニ

245

冬の夜のモツァルト

248

別刷写真版目次

7

掲載紙誌一覧

後記

別刷写真版目次

- | | | |
|----|-------------------------|--------|
| 1 | 梓湖風景 | 対32頁より |
| 2 | 梓湖風景、釣をする人 | |
| 3 | 網走水族館にて、昼寝するトド | |
| 4 | 網走水族館にて、あくびするトド（以上著者撮影） | |
| | 対100頁より | |
| 5 | 西本願寺本三十六人家集より「重之集」 | |
| 6 | シャガール個展のファイシユ | |
| 7 | ピカソ銅版画展のファイシユ | |
| 8 | モロ―「ガラテア」 | |
| | 対216頁より | |
| 9 | レンブラント「金計量者」 | |
| 10 | ヤン・ファン・デル・ハイデン「フェーレ教会」 | |
| 11 | ボナール「少女とかもめ」 | |
| 12 | フンデルトワッサー「大きな道」 | |

福永武彦
第二隨筆集

旅

京だより

一、土鈴

この前京都へ行った時のことだが、或る晩、細君と河原町を散歩していて、ぶらりと一軒の古道具屋にはいった。二人とも、なんぞ掘り出し物でもないかときよろきよろ見まわしているうちに、細君があら土鈴があるわ、と頓狂とんきやうな声を出した。見れば棚の隅に、ほこりだらけの箱に詰め込まれて、数多い土鈴がごろがっている。店番をしている若い男の店員にさっそく見せてもらうことにした。

旅
と言うと如何にも造詣があるようだが、実はわが家にたった一つ、人から貰って、英彦山ひこさんガラと呼ぶ福岡県の郷土玩具があるだけにすぎない。(但しその名前は後のちまで知らなかった。)音色がひどく澄んでいて、かねがね土鈴なるものに関心があったから、僕も細君も、

旅先でこれほどたくさんの土鈴にお目にかかったのにはびっくりした。何でも蒐集していた人が手放したとかで四十個ばかりある。三つや四つならただでさしあげます、と店員に言われても、残念ながらどれが珍しいのか当方には見当もつかない。一つ一つ鈴の音色をたのしんだ末、全部ひっくりくるめていくら、と細君が切り出した。先に見つけたのだから、当然自分が買う氣でいる。僕はにやにやして彼女が店員と掛け合うのを見ていた。

おぼし召しでけっこうです。これが返事。商談ととのつたと見たのか、早くも土鈴を一つずつ紙に包み出した。心配になって来た細君が尚も値段を訊くと、店の奥からハترون紙の茶封筒を持って来て、僕らの前に置いた。

この中においくらでもどうぞ。そう言ったなり、せっせと包装を続けている。細君と僕とは顔を見合せるばかり。これが京都式商法というものか。

私のお小遣いで買うんだから、たくさんは出せないわよ。細君は遂に断固として宣言し、金子そこばくを入れ、僕らは大荷物を抱えて、礼を言われながら店を出た。諸君、一体彼女はいくら入れたと思いますか。

（昭和三十二年五月）